

ひょうご 水百景

No.206 新堀川（西宮市）

～武庫川の伏流水を水源として開削された農業用水路～



写真-1 JR 東海道本線・甲子園口駅の東を流れる新堀川（令和6年4月撮影）

■ 尼崎藩主・青山幸成が開削させた農業用水路～新堀川

写真-1 は、JR 東海道本線・甲子園口駅の東約 150m を北から南に流れる法定外河川の新堀川です。4 月下旬だったので、右岸沿いに植えられたヒラドツツジが咲き誇っていました。

新堀川は、江戸時代の寛永 13（1636）年に武庫川右岸堤防近くの鯨池（現・鯨池浄水場）に湧き出る伏流水を水源として、堤防に沿って今津まで開削された農業用水路です。

鯨の潮吹きのように勢いよく水が吹き出していたのでしょうか。武庫川のすぐ近くなので気になります（図-2 参照）。

この用水路は、写真-1 の場所から約 1.7km 下流で二級河川・新川に合流しています。

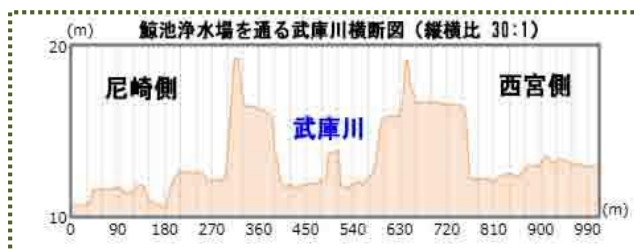


図-2 鯨池浄水場を通る武庫川横断面図（国土地理院地図から作成）



図-1『慶長十年摂津国絵図』

（「にしのみやデジタルアーカイブ」から引用・加工）

『西宮市史 第二巻』によると、武庫川兩岸の連続堤が完成して流路が固定され、洪水被害を最小限に食い止めることができるようになったのは豊臣時代の頃といわれています。

江戸時代初期の慶長 10 (1605) 年に描かれた『摂津国絵図』(図-1)を見ると、「武庫川及び枝川の兩岸には川筋に並行して黒線が描かれており、明らかに連続堤の完成を証明している。」と記されています。

これにより武庫川氾濫原の荒地を新田にする可能性が出てきたわけですが、武庫川の透き水(伏流水)が多く、簡単には開発できません。そこで新田開発に積極的な尼崎藩主・青山幸成^{※1}(よしなり)は、透き水抜きと用水源を目的として水路を開削させます。これが新堀川で、「返堀(かえしほり)」とも称されました。

なお、新堀川は、「今津まで開削された」とあり、図-1 の絵図の武庫川の派川・枝川に合流させたと考えるのが自然だと思いますが、明治 18 (1885) 年大日本帝国陸軍参謀本部測量局作成の「尼崎」(1/25,000)を見ると、新堀川は枝川にぶつかった後、向きを南西に変え枝川に沿って流れています。

枝川に合流できなかったのは、武庫川と同様に枝川もほぼ天井川だったことから縦断勾配が取り付かなかったことが原因と思われます。その枝川は、大正 9 (1920) 年から大正 12 (1923) 年にかけて東海道本線以南の武庫川約 5km を改修した際に、申川(さるがわ)とともに廃川後に埋め立てられています。



写真-2 新川と新堀川の合流部

※1 青山幸成：摂津国尼崎藩初代藩主。天正 14 (1586) 年、徳川家の譜代家臣・青山忠成の四男として浜松で誕生、慶長 4 (1599) 年に元服して徳川秀忠の近侍として仕えた。慶長 7 (1602) 年、下総国印旛郡で 5 百石を与えられる。慶長 19 (1614) 年からの大坂の陣にも参加し、元和 5 (1619) 年には書院番頭・小姓・10 人組頭・評定衆に任じられ、常陸国新治郡・筑波郡などで 1 万石を与えられ、以前からあった所領とあわせて 1 万 3 千石の大名となった。

寛永 12 (1635) 年 7 月 28 日、5 万石に加増された上で摂津尼崎藩に移封された。幸成は藩政の基礎を確立するため、儒者を招聘して文学を奨励し、大庄屋制度を制定、積極的な新田開発を行って 4 千石を開発した。寛永 20 (1643) 年 1 月には 3 代将軍・徳川家光の見舞いを受けたが回復せず、2 月 16 日に死去した。享年 59。

■ 農業用水が確保されたことから新田開発が進む

新堀川開削によって農業用水が確保されたことから、寛永 14 (1637) 年に上瓦林村地内に助兵衛新田(上新田)が、下瓦林村地内に久右衛門新田(下新田)が開かれました。

次いで上瓦林村・瓦林村・下瓦林村の用水源であった百間堀の水の配分を受けて、寛永 19 (1642) 年には上瓦林村地内に五郎右衛門新田(中新田)が開かれました。

さらに明暦 2 (1656) 年に上瓦林村地内に荒木新田が、寛文 3 (1663) 年頃から樋口屋新田が開発され、延宝 4 (1676) 年には上大市村地内に大野新田が開かれています。

このように、新堀川開削によって開発者の名が冠せられた新田の開発が大いに進みました。

ただ、「連続堤の完成によって開発の可能性が出てきた」とはいうものの、それほど堅牢な堤防ではなく、「洪水被害を最小限に食い止める」程度のもので、お百姓さんが安心して稲作を続けられるような立派な堤防ではなかったと思われます。

それでも多少のリスクは承知の上で氾濫原を開発したのは、藩主が新田開発を奨励するため、鋤下(くわした)年季といって、新田開発当初から村高に登録されるまでの一定期間(ほとんどの場合 3~5 年)年貢を免除、あるいは軽減するといった恩典があったからと思われます。

時は流れ、戦後は農地の宅地化が進み、少なくなった農家は地下水を汲み上げて農業用水としているので、現在の新堀川は農業用水路としては機能していないとか。

ただ、新堀川河床の所々にピットが設けられていて、ピット内の水は消火用水として取水できるようになっています。

また、西宮市の鯨池浄水場(写真-3 参照)では、新堀川の機能維持と周辺の環境保全のために、状況に応じて浄水場の水を維持用水として新堀川に流しているそうです。



写真-3 鯨池浄水場直下の新堀川
(水路の向うに見える建物が鯨池浄水場)

■ 交通手段に恵まれなかった瓦木村、甲子園口駅設置運動から区画整理事業を導入

旧下新田村の戸口（ここう：戸数と人口）については、江戸時代の延享 3（1746）年が 20 戸・110 人、明治 5（1872）年が 19 戸・101 人、大正元（1912）年になっても 21 戸・111 人とほとんど変化はありません。その主因は、旧下新田村を含む瓦木村※2 が、村内に当時省線と称していた旧国鉄（現 JR）と阪急電車の 2 路線が通りながら駅がなく交通手段に恵まれなかったからです。

昭和 7（1932）年に吹田駅～鷹取駅間の電化計画が発表されたのを機に新駅設置運動が盛り上がり、同年 6 月瓦木村長が新駅設置請願書を鉄道大臣に提出します。しかし、旧国鉄側は新駅設置費用の全額と新駅敷地を地元が提供することを条件としたため、地元としては費用（当時の瓦木村収入の 2 か年分相当の 9 万 2 千円）や提供する土地についての複雑な利害も絡んで調整が難航し、当局との交渉も 2 ヶ年に及びます。

結局、費用の大半を新駅設置で大きな利益を受ける加賀土地株式会社（明治 29（1896）年の武庫川決壊で右岸にできた松林 5 万坪の所有会社）が引き受け、5 千円と駅の北半の土地を旧下新田村が提供することに。残りの費用 2 万円と土地を生み出すため、以前から構想としてあった下瓦林・瓦林・下新田を中心とした甲子園口土地区画整理事業を導入します。

昭和 9（1934）年に組合が設立され、駅南側に整然とした住宅地（現在の甲子園口 1～5 丁目。このうち下新田地区はほぼ 1～2 丁目に相当）が整備されました。

こうして、旧下新田村を中心とした地元の熱意が実り、昭和 9（1934）年 7 月に甲子園口駅が開設されました。

翌年には駅北部に武庫川第一土地区画整理組合、昭和 14（1939）年に旧下新田村約 30 戸を含む地域（ほぼ現在の甲子園口北町）に同第二土地区画整理組合も設立されました。

これにより駅周辺は美しい住宅地が整備され、旧下新田村の戸口も昭和 16（1941）年に 546 戸・2,757 人と急増しました。旧下新田村の残りは松山町・松並町・熊野町・上甲子園 1 丁目の各一部に編入されています。



写真-4 昭和 25（1950）年頃の甲子園口駅
（『目で見る西宮の 100 年』より引用）

※2 瓦木村：明治 22（1889）年 4 月 1 日町村制の施行により、上瓦林村・下瓦林村・瓦林村・高木村・荒木新田・助兵衛新田・下新田村・五郎右衛門新田村の区域をもって発足。昭和 17（1942）年 5 月 5 日西宮市に編入。同日瓦木村廃止。

■ 新堀川は、昭和初期に区画整理事業の中で改修される

新堀川は、寛永 13（1636）年、鯨池（上田市）から今津まで開削されましたが、長らく草木の生えるままに放置されていました。

昭和 9（1934）年以降、旧瓦木村では次々と行われた区画整理事業の中で新堀川の改修も行われ、およそ山手幹線以南は柳、以北は桜が川沿いに植樹され、美しい姿になりました。

『にしのみやデジタルアーカイブ』では、確かに写真-5・6 のように東海道本線付近を流れる新堀川沿いに柳の木が植えられています。令和 6（2024）年 7 月上旬に新堀川沿いを現地踏査した際に柳の木を見た記憶はなく、ほとんどが桜の木だったと思います。いつかの時点で植え替えられたのかも。



写真-5 昭和 30（1955）年代の新堀川
（東海道本線の北から下流方向を撮影）
（『にしのみやデジタルアーカイブ』から引用・加工）



写真-6 昭和 30（1955）年代の新堀川
（東海道本線の南から下流方向を撮影）
（『にしのみやデジタルアーカイブ』から引用・加工）



写真-7 写真-6の撮影場所から約100m南の地点にて撮影した現在の新堀川。前方の木は桜。

■ 鯨池浄水場の今

「鯨池」の由来については、元々鯨の形をした池があったとか、鯨の潮吹きのように水が湧き出ていたとか、池に大ナマズがいて、それがクジラのようなことからといった諸説があるようです。

鯨池浄水場は、旧甲東村^{※3}の末給水地域へ給水するため、昭和28(1953)年から鯨池付近の地下水(浅井戸)の取水を始めました。

その後、百間樋用水路から取水した水を水源に加え、浄水施設を設置して昭和39(1964)年から浄水場として稼働を始めました。

さらに浄水施設拡充事業により昭和47(1972)年から新幹線六甲トンネル湧水を水源に加え、平成4(1992)年度から工業用水道の余剰水を転用し、淀川からも取水を始めました。

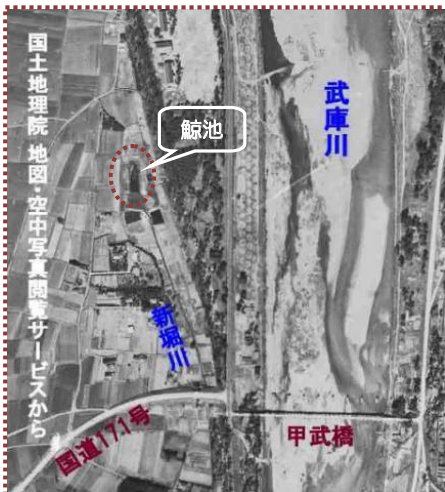


写真-8 鯨池付近の空中写真を加工
(昭和23年3月米軍撮影)

平成22(2010)年度末に鯨池浄水場の浄水・配水機能を停止し、同浄水場からの配水地域には、阪神水道企業団が高度浄水処理した水道水を配水しています。



図-3 新堀川の現在

※3 甲東村：明治 22（1889）年 4 月 1 日町村制施行により、門戸村（飛地を除く）・上ヶ原新田村・段上村・上大市村・下大市村・樋口新田・神呪村・広田村（飛地）の区域をもって発足。昭和 16（1941）年 2 月 1 日、西宮市に編入。同日甲東村廃止。

■ モノローグ

令和 6（2024）年 7 月のカンカン照りの日に現地踏査のため新堀川沿いを歩いていると、武庫川堤防の裏法に堤防強化の一環として施工されたドレーン（フトン籠を並べたもの：写真-9）が目に入ってきました。武庫川河床高と堤内地盤高がそれほど変わらないこのあたりがハザードマップでどのように表示されているのか想像はつきます。

一方、近くの空き地では「好評分譲中」と書かれた数本の幟（のぼり）がはためいていて「好評」の文字を複雑な思いで眺めていました。

現在の武庫川は、関係者の努力で洪水に対する安全性は着実に向上してきてはいるものの、地球温暖化の影響により激甚化する豪雨災害がいつ発生するかわかりません。必要な対策は講じているとはいっても、「万が一」に備える必要はあります。

～備えあれば患いなし～



写真-9 樋ノ口町 2 丁目付近の武庫川堤防のドレーン

ヒラドツツジ

ツツジ科ツツジ属の半常緑樹。古くから平戸で栽培されてきたことが名前の由来とされ、正徳 2（1712）年に出された『和漢三才図会』にはすでに「ヒラドツツジ」の名で紹介されている。平戸は古くから交易の中心地であったためケラマツツジ（沖縄諸島原産）・モチツツジ（中部日本原産）・キシツツジ（西部日本原産）・タイワンヤマツツジ（広東～雲南、台湾～奄美大島）など各地のツツジが持ち込まれ、寺院や武家屋敷内でそれらが自然交雑し、実生を繰り返す、大輪のツツジ群ができたこととされ、それらの中から特に美しいものを選抜し増殖させたものである。



写真-10 新堀川右岸に咲いていたヒラドツツジ

【参考資料】

- 1 『西宮市史 第二巻』 魚澄惣五郎編 昭和 35 年 3 月
- 2 『西宮歴史調査団ニュース第 1 号～新堀川 はし物語』 西宮市立郷土資料館 平成 26 年 3 月
- 3 『町名の話～西宮の歴史と文化』 山下忠男 平成 5 年 6 月
- 4 『古地図で見る阪神間の地名』 大國正美編著 平成 17 年 8 月
- 5 『甲子園口駅の木造駅舎を偲ぶ・南口編』 きーぼー堂ブログ 平成 27 年 2 月
<https://keyboar.hatenablog.com/entry/20150228/1425073765>
- 6 『新堀川』 にしのみやデジタルアーカイブ 平成 29 年 2 月更新
https://archives.nishi.or.jp/O4_entry.php?mkey=1509
- 7 『水道施設の概要～鯨池浄水場』 西宮市 HP 平成 30 年 2 月更新
<https://www.nishi.or.jp/kurashi/suido/jigyo/suidoshisetsu.html>
- 8 『青山幸成、瓦木村、甲東村、ヒラドツツジ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和 6（2024）年 10 月 『ひょうご水百景』 No.206
改訂：令和 8（2026）年 8 月 『ひょうご水百景』 No.206